

## 極小未熟児 Kちゃん の ケア の あり方 に ついて

岐阜県 中央児童相談所  
山本早紀子

はじめに

児童福祉法が制定され、早くも40余年、この母乳児をとりまく、福祉環境ならびに社会構造は、著しい変化をとりて来ている。中でも出生率の低下・離婚率の上昇は、乳児院及び保育園・幼稚園等の存在に影響を及ぼしつつある。このようなかゝって乳児院も、現代社会のニーズに合致したあり方へ、向い直されて来ている。

昨年度は、私自身乳児院にあり、職員ともども一丸となり、心からの処遇と対応に取り組んで来た。さまざまなケースの中から、障害を帯びた乳児のその数は多くはないが、日進月歩する現代医学の恩恵を受け、7ヶ月出産の極小未熟児、右手足にマヒのあるKちゃんのプロセスと機能訓練を通し、それに際し、職員やケアを分析・考察し、その一端を報告したいと思えます。

## I 試行錯誤期 (初期)

氏名 K・D 男児

生年月日 昭和63年2月16日

本児の両親は、内縁関係で父親40才、母親22才、誰れからも祝福されず、一度も健診も受けず、出産準備一切ないままに、三重県の〇〇産院にこぼ込み、在胎28週(早産7ヶ月)、経膈頭位分娩する。お、そこでほととぎすにみえず、右に酸欠吸入を受けながら、三重県〇〇市赤病院へ搬送された。

出生時体重 950g 身長 22.0cm 胸囲 22.0cm  
呼吸困難、チアノーゼ出現、人工換気を受ける。経鼻気管内挿管下にマチューラ栄養。約3ヶ月後やっと体重が2000gを越え、ミルクが経口投与となる。臨床診断名は、超低出生体重児、呼吸窮迫症候群、高ビリルビン血症。兄の母にKちゃんの母親が行方不明となり、母方の実家が岐阜市にある為、祖父母をとりし、乳児院への入所が決定となった。私達は、Kちゃん受入れのため打合せを行い、受入れ前にKちゃん退院に職員2名が三重県に向う。

7月7日 Kちゃんを受入れる。生後4ヶ月、体重2590g、首は可なりかたまりが表情なく、哭かない。斜視がみられる。嘱池医からは頭部CTスキャン、胸部X線写真の再検査と発達チェック、呼吸状態

を観察を指示された。

本児のミルク哺乳量は、4ヶ月まで1日平均500~600ccの間で、この値は健常児の1~2ヶ月児のものと同じで、健常児の場合、月令が増えるに従って1,000cc近くまで上がることを考えると、約半分強で大変少ないと言える。私達はKちゃんをケアする乳児院のメンバーは、絶えずKちゃんの状態を診察、健康状態を観察しながら、常に嘱池医と連携をとりあわねばならぬ、と。なぜならば、本児は非常に気管支が弱く、上気道炎から急性気管支炎及び気管支肺炎に罹患(2年間に4回)し、ひどい咳、喘鳴が続く。ミルクの飲みが悪くなり、受診すると血液検査、X線撮影を受け、吸入・点滴治療を毎日受けねばならなくなり、私達は毎日交代で、タクシーで通院しなければならなかった。又感冒性下痢症なども何回も罹患、10ヶ月に入り6kgにまで下がったのに、体調がよくなることもなく、遠慮をくりかえす。6kgになるのは1才児に相当するからであつた。又本児通院のため、他の感染性病原菌を持ちこむことも度々のため、

1月27日(11ヶ月児)発熱が続き咳、鼻汁、喘鳴をともない、小児科受診。コップリブ膜を指摘され麻疹を診断。他児に隔離、他児への感染・予防のため1才以上は、麻疹ワクチン接種、1才未満児にはトーグロブリン注射を接種された。Kちゃんの体調はよくなるので、1才までには健康管理のみで終始したい。

1才を迎えたKちゃんは、1才児健康診断を受け、右半身の動きが悪いので、脳性小児マヒの疑いを指摘され、頸部CTスキャン、脳波検査を施行した結果、左脳半球萎縮、左側脳室の拡大、左小脳下木質を診断。しかし進行はしてないとのこと。脳波については、左右差はあるがこれも進行してない。機能訓練が必要なので、〇〇学園の受診を嘱池医より勧められる。私達は、話し合いを繰り返し、まず私達自身は、〇〇学園の理学療法士を招き、研修を受け、スタッフ全員が研修する。

嘱池医は、Kちゃんの1才1ヶ月定期検診の時、右下肢異常、股関節X線写真の要ありと言われ、股関節X線写真施行。整形外科受診の結果、左右の下肢の長さ

は、異常なく、長さがちがってみよ子の体、姿勢が悪く、右下肢がしつかりのびきつていないためと言われた。

Ⅲ 試行錯誤期 (後期)

Kちゃん体、月令では13ヶ月になったが、運動発達では6ヶ月児程度。右半身不全マヒ、座りせ、左に倒すと左手を反動的に出すのが、右へ倒すと右腕で支えようとする。体を支えて之にせると左足は右へ出たてかが入るが、右足は後方になり、力が入らない。足の左右の長さには差がみよれるが、機械訓練により差障を小さくさせられた。

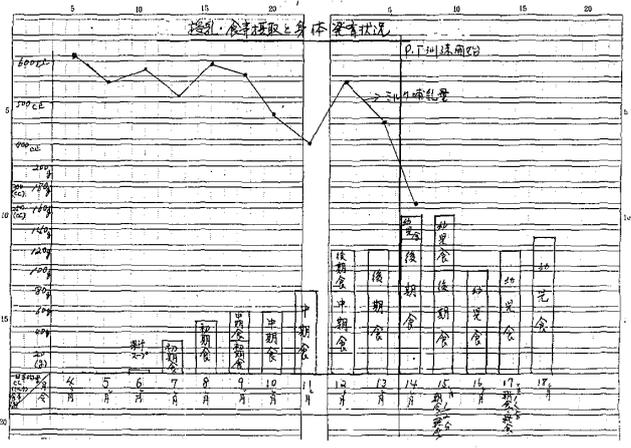
職員A Kちゃんへの対応について

- ④ 運動を十分させること
  - ・足の屈伸(寝かせた姿勢)
  - ・足指をまよらす。
  - ・寝かせた姿勢で右足を耳の横につけるように上げ、肘、腕、手首、掌、指の順に伸ばし、南くことと繰り返す。
  - ・おもむきのあそびに入らぬ食卓の上の手を置き、食事をさせる。
  - ・トレーニングボールを使用し、体調のよい時、訓練する。
  - ・毎月一回00学口のphysical therapy=理学療法を行うための通院させる。P.T訓練と云う。

P.T訓練に通院(感じたこと)

毎月Kちゃんにつき、P.T訓練にメンバーが交代して通院する。対ノの関わりの中で、本児自身の頑張りも相まって、かなりの成果があがっていったと思う。

本児ははじめいやなことをされるので泣き加えられたが、集団生活の中で唯一の職員が愛情独占の場は通院であり、そのかわりが又大きく本児を延び厚動力をたと思われ。それは、食事の摂取量と云ってあらわれ、体重の増加、あちの発達に影響をよせていったと思われ。本児はP.T訓練後、本児をりに反復練習したり、努力して一歩一回した。本児はP.T訓練をつづける中歩行可能となり、今器具をして歩けば転ぶから自由に歩きたまわっている。こまごまするにほほえまわったが、職員一人と云って本児にかわったチームワークの成果と云って思っている。(P.T訓練の詳細は口頭発表にて) 以上



本児の身体発育状態一覧表

